

「やってみたい」という思いをもち、
友達と考えを伝え合いながら、
自分たちで課題を解決する子の育成

—特別支援教育 総合的な学習の時間
地しんから自分の身を守るの実践を通して—

幸田町立深溝小学校 教諭 山本 治加

<研究の概要>

本研究では、特別支援学級の児童を対象に、発災後の避難の仕方について活動や体験を通して、意欲的に取り組み、考えを伝え合いながら自分たちで課題を解決できる子を目指した。三河地震後の藁を使った生活体験や避難グッズをリュックに詰める活動、備蓄品一覧の資料等を使った話し合いから、自分事として捉え、避難の仕方を考えることができた。

<検索用キーワード>

自分事 体験 意欲的 話し合い 資料提示 振り返り

1 はじめに（主題設定の理由）

本学級は、6年生1名、4年生2名、3年生2名の計5名の児童が在籍している自閉症・情緒障害学級である。休み時間は外で元気よく鬼ごっこをして遊ぶが、自分のルールを優先してしまい、揉めることも多い。そのようなときには、教師が仲裁に入り、友達と楽しく鬼ごっこをするための方法を考えられるようにしている。

1945年に起きた三河地震は、深溝学区にも大きな被害をもたらした。現在でも深溝断層が学校の敷地内を通っている。それに伴って、年9回の避難訓練のうち、地震の避難訓練が6回ある。しかし、毎回避難訓練をしていても子どもたちは「本が読みたいから避難したくない」「怒れているから避難しない」など自分の気持ちを優先し、いろいろな理由を付けては避難を渋る様子が見られる。近年日本各地で大きな地震が起こっているため、自分の身は自分で守り、発災後に安全を確保しながら行動する力が必要となってくる。

そこで、身の回りにある様々な問題状況について、自ら課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決していく児童の姿をめざしている総合的な学習の時間を用いて、発災後の避難について学んでいくことが最適だと考えた。

以上のことから、主題を『「やってみよう」という思いをもち、友達と考えを伝え合いながら、自分たちで課題を解決する子の育成』とし、副題を一特別支援教育 総合的な学習の時間 地しんから自分の身を守るの実践を通して一と設定し、研究を進めることにした。

2 めざす子ども像

- ・意欲的に活動に取り組める子
- ・自分の考えをもち、友達と考えを伝え合いながら、自分たちで課題を解決できる子

3 研究の仮説

<仮説Ⅰ>

身近に感じることでできる体験や活動を多く設定すれば、発災後の動きを自分事として捉え、意欲的に活動に取り組むことができるであろう。

<仮説Ⅱ>

話し合いの場において、子どもたちの考えを出しやすくするための資料提示を工夫すれば、避難の仕方について根拠を伝え合い、自分たちで課題を解決することができるであろう。

4 研究の手だてと検証方法

（1）研究の手だて

<仮説Ⅰに対する手だて>

手だて1 身近に感じることでできる体験や活動

地震を身近に感じられるように、①三河地震後の生活を体験した後に、現在の避難所の生活も体験する。また、②実際の避難を想定し、自分が持って行きたいと考えた避難グッズ（資料1）をリュックサックに詰めて避難する活動を行う。多くの体験や活動を設定することで、自分事として捉えることができ、「やってみよう」「もっとこうしたい」などの気持ちが生まれ、意欲的に活動に取り組めるだろう。



資料1 詰める活動の際に使った物

<仮説Ⅱに対する手だて>

手だて2 子どもたちの考えを出しやすくするための資料の提示

本学級の子どもたちは、視覚優位な子たちが多い。そこで、子どもたちの考えを出しやすくするために、①道路の写真を提示し、安全な避難経路について考えさせたり、②防災倉庫の備蓄品一覧を見せたりする。そうすることで、自分の考えに根拠をもって話し合い

に臨むことができ、自分たちで課題を解決することができるだろう。

(2) 研究の検証方法

これまでに述べてきた研究の仮説やそれに対する手だての有効性を検証するために、児童Aを抽出児童とし、単元を通して変容を追う。その際、授業での発言や様子、授業記録、振り返りを基にしながら検証を行っていく。

(3) 抽出児童

3年生の児童Aは、好きなことに関しては意欲的に活動する。しかし、苦手なことや興味が湧かないことだと意欲的に取り組むことが難しい。自分の考えを頑張って伝えようとするが、他の子の考えよりも自分の考えの方が正しいと捉え、押し通そうとすることがある。そこで、身近に感じられるような体験や活動を繰り返すことで、意欲的に活動に取り組んでほしい。また、友達と考えを出し合いながら、協力して課題を解決していくことを願っている。

5 研究の実践と考察

(1) 手だて1の検証(身近に感じることでできる体験や活動)

①避難所体験で、自分が避難したつもりで考え、次時への思いをもった児童A

ここでは、発災後の様子を身近な事として捉えられるように、三河地震後の生活や現在の避難所生活の様子を体験した児童Aの姿について述べる。

子どもたちは、三河地震という名前は聞いたことがあっても、どんな規模の地震だったのかや、発災後の様子などはよく分かっていない。そこで、当時の避難生活の様子を体験してみることにした。発災後、家が傾いたり2階の床が抜けたりして家の中では寝ることができなかった。そのため、人々は田んぼや畑に藁を敷いて寝ていた。そこで、同じ状況を再現し体験を行った(資料2)。



資料2 三河地震の体験をする子どもたち

子どもたちは、体験したことの無い活動だったので「早く畑に行きたい」と言い、わくわくしている様子であった。準備を終え、いざ藁を敷いて寝てみると寝心地が悪く、隣の人が少しでも動くと腕に藁が当たった。児童Aもみんなと同じように、藁の感触や音が気になり、児童Bに「Bさん動かないで」と何度も注意していた。児童Aは、「ぼくはもう無理。こんな生活が今の時代も続くんだったら生きていけない」と答えた。

そこで今度は、現在の避難所生活を体験してみることにした。初期避難時に貰える1人あたりのスペース(1m×1m)を新聞で再現し、その上で過ごした(資料3)。児童Aは「狭いなあ。足がすぐ出てしまうよ」と答えた。さらに、児童Bと2人で何やら相談し始め、「Bさんと2人で使ったら足も伸ばせて過ごしやすいよ」と言い、実際にやって見せた。藁で寝たときよりも過ごしやすかったため、児童Aは地震が起きてから開設される避難所について興味をもった。しかし、どうやって避難所まで行ったらいいいのか、何を避難所に持って行ったらいのかが分からなかったため、みんなで考えたいという課題をもった。



資料3 現在の避難所を体験する子どもたち

②適切な量を詰めて避難することが大事だと気付いた児童A

ここでは、発災後の動きを自分事として捉えられるように、避難グッズを詰める活動をした児童Aの姿について述べる。

前時までに本やタブレットで調べ学習を行ったり、防災倉庫にある物を確認したりして、何を避難所に持って行ったらいいのかを考え、持って行く物リスト（資料4）にまとめた。そして、自分事として捉えられるように、普段使っているリュックサックに詰めることにした。子どもたちは、自分だけの避難グッズを作れると分かり、この授業の前から「今日はリュックを使う？今日使いたい」と意欲を見せる姿が見られた。授業が始まり、児童Aも張り切って持ち物を詰めていた（資料5）が、途中で手が止まってしまった。自分が考えた持ち物の量と持ってきたリュックサックの大きさが合わずに入りきらなかったのだ。それでも「全部持って行きたい」と言い、どうにかして持って行ける方法はないのかと必死に考えていた。入りきらない分は手に持って避難することにした。左手にはペットボトルの水、右手にはアウトドアの机と椅子のセットを持って校内を歩き始めた。最初は体力もあったため、余裕の表情を見せた。しかし、5分も経たないうちに疲れてしまった。他の子も同様に疲れが見え、座り込む中で児童Aは座らず避難所（教室）にたどり着くことができた。しかし、避難所に着いてすぐに「休憩」と言って動けなくなってしまった。お茶を飲みながら10分ほど休むと動くことができるようになった。避難をしてみても、児童Aは「ちょっと重くて最悪だった」と言った。そこで、教師が「地震が来た時にこれだけの荷物を持って行くのかな」と聞くと、全員首を横に振り「持って行かない」と答え、児童Aが「もう一度考え直したい」と言った。

①では、最初に避難所のことを身近に感じられるように体験したことで、意欲的に取り組むことができた。三河地震後の生活体験を行ったからこそ、児童Aは「ぼくはもう無理」という感想をもった。これは、三河地震という名前しか聞いたことのなかった児童Aが、三河地震について自分事として捉えた瞬間であると考えられる。この活動を通して、当時の状況がいかに大変だったか身をもって知ることができた。そして、現在の避難所を体験することで、藁で寝たときよりも過ごしやすいつ感じ、避難所について調べたいという意欲につながった。

②では、児童Aは避難所に持って行く物を45個書いた（資料4）。このリストを作ったときには、持って行く物が多いとは感じず、全部持って行くことが大事だと思っていた。実際に詰めてみると、全く入らなかったが、どうにかして詰めようと必死に頑張る姿は意欲的に活動に取り組んでいると言える。そして、実際にリュックを背負って歩くという体験も行ったことで、徐々に自分事として捉えることができ、大変さが身に染みて分かった。そして、もう一度考え直したいという思いにつながったため、手だて1は有効であったと言える。

No.	品名	No.	品名	No.	品名
1	クッション	17	はぶらし	33	くつ
2	まくら	18	カイロ	34	ほれいざい
3	ライト	19	ジップロック	35	ちず
4	ゲーム	20	タオル	36	でんち
5	スマホ	21	コップ	37	じゅうでんき
6	ノート	22	サランラップ	38	水
7	ヘルメット	23	マッチ	39	ガス
8	お金	24	ナイフ	40	ふくろ
9	くすり	25	ふく	41	てぶくろ
10	カロリーメイト	26	テーブル	42	おむつ
11	目ざまし時計	27	皿	43	スリッパ
12	ぬいぐるみ	28	風よけ	44	スプーン
13	やくもの	29	はさみ	45	はし
14	ラジオ	30	ぼんそうこう	46	
15	写真立て	31	ほうたい	47	
16	写真	32	きゅうきゅうばこ	48	

資料4 児童Aが考えた持って行く物リスト（45個）



資料5 避難グッズをリュックサックに詰めている子どもたち

(2) 手だて2の検証(子どもたちの考えを出しやすくするための資料の提示)

①安全な避難経路について考える中で、歩道橋が危ないと気付いた児童A

ここでは、考えを出しやすくするために危ない道と危なくない道の写真を提示し、友達と話し合った児童Aについて述べる。

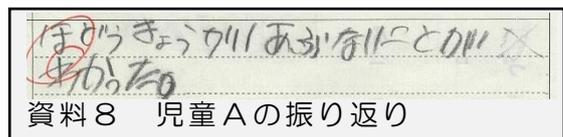
どの道を通ったら安全に避難できるのかを考えるために、倒壊する恐れのある物が写っている危ない道と危なくない道の写真を数枚用意し、A3に拡大して提示した。さらに、手元で詳しく見ることができるよう、同じ写真を縮小した物をワークシートに貼らせた。そして児童Aは、資料6のようにまとめた。最初に歩道橋について問う(資料7)と、児童Aは「歩道橋は知っているよ。毎日通るもん」と自慢げに話した。さらに、「学校に行くときに、毎日通るから、歩道橋が危ないわけない」と答えた。児童Bは、「地震のときに歩道橋が落ちてくるから危ないよ」と言った。それに対し、児童Aは「歩道橋は通るためにあるんだよ」と言った。すると児童Cは、黒板の写真を指差ししながら「歩道橋の下を車が通ったら、車が壊れる。ガラスにぶつかる」と答えた。児童Aは友達のを聞き、「あっ」と声を出し、何かに気付いたような顔をした。そして、「ガラスに穴が空くし、車がぺっちゃんこになる」と言い、考えが変化したように見えた。しかし、普段登校のときに通る歩道橋が危ない場所だとまだ結びついていなかったようで、再び悩む姿が見られた。そこで、別の写真を提示し、考えられるようにした。黒板に貼ってある阪神淡路大震災後の道路の様子やブロック塀のある狭い住宅街の写真などを指差ししながら「電柱や標識が傾いているよ」「壁と壁の間が狭いよ。逃げられないから危ない」などと声が挙がった。特に震災の写真を見てからは、危ない場所が次々と挙がるようになった。子どもたちは、他の子の考えに納得しながら、考えを付け足していく姿が見られた。そこで、教師が児童Aに、「さっき歩道橋が危ないか、危なくないか迷うって言うって言ったけど、今はどうかな」と問い返したところ、「歩道橋は危ないかも」と答えた。そして、授業の振り返りには(資料8)「ほどうきょうがあぶないことがわかった」と書いており、最初は絶対に危なくないと思っていた児童Aの考えが変わったことが分かる。



資料6 歩道橋を「危なくない」に分けた児童Aのワークシート

教師：歩道橋は危ない？危なくない？
 A：歩道橋は知っているよ。毎日通るもん。
 学校に行くときに、毎日通るから歩道橋が危ないわけない。
 B：地震のときに歩道橋が落ちてくるから危ないよ。
 A：歩道橋は通るためにあるんだよ。
 ぼくは、歩道橋の下を横切ったことがないよ。
 D：地震のときに歩道橋を渡ったら、落ちて死んでしまうよ。
 C：鉄が耐えきれなくて歩道橋が落ちちゃうし、階段も危ない。
 歩道橋の下を車が通ったら、車が壊れる。ガラスにぶつかる。
 A：あっ(何か気付いた顔をする)
 ガラスに穴が空くし、車がぺっちゃんこになる。
 下を渡る方がいいかもしれない。ん？学校に来るときに渡るから、やっぱり歩道橋を通るかな。迷う。
 教師：(阪神淡路大震災の写真を提示)これは危ない？危なくない？
 A：危ないに決まっている。
 E：電柱や標識が傾いているよ。
 C：道路がぐちゃぐちゃ。
 教師：これは阪神淡路大震災の地震のときの写真だよ。
 B：地震やばいね。
 (ブロック塀の写真を提示)これは危ない？危なくない？
 A：危ないと思うよ。壁が崩れちゃうかもしれない。
 D：壁と壁の間が狭いよ。逃げられないから危ない。
 E：地震が来たらこの壁も崩れると思うよ。
 (他の写真も同じように提示)
 ~中略~
 教師：Aさんは、さっき歩道橋が危ないか、危なくないか迷うって言うって言ったけど、今はどうかな。
 A：歩道橋は危ないかも。

資料7 授業記録



資料8 児童Aの振り返り

②防災倉庫の備蓄品一覧を基にして話し合う中で、必要な物が変化した児童A

ここでは、安全に避難するための根拠を明確にするため、備蓄品一覧の資料を見て話し合った児童Aについて述べる。

再度持って行きたい物を考えた子どもたちは、友達は何を持って行くのかという疑問をもったので、話し合いをすることにした(資料9)。水を持って行きたいと答えたのは、児童Bと児童Cの2人だった。児童Bは、「喉が渴いたときに飲めばいいからいるよ」と答え、続けて児童Cは「水があれば何年か生きられるよ」と答えた。それに対し、児童Aは、「どっちも学校にある。だから、いらなと思う」と言った。徐々に子どもたちの中で防災倉庫の備蓄品一覧の資料を使って確認したいという気持ちが高まってきたため、全員にその資料を配付した(資料10)。この資料は、防災倉庫の見学の際に見つけた資料であり、いつでも確認できるように背面掲示として掲示しておいたものである。特に見方は伝えていないが、資料が配られると、子どもたちは水と食料を真っ先に確認する姿が見られた。資料を基に何日分の水や食料が備蓄されているのか計算すると、足りないことが分かった。それでも、児童Aは水について「でもぼくはそんなにいらんけどね」と答えていたが、友達の「水がなかったら、暑くて死んじゃう」という考えを聞いて、納得した表情を見せた。振り返りでは(資料11)「みずは、さいしょはいらなとおもったけど、あとからいるにかわった」と書いており、最初と考えが変わったことが分かる。

①では、写真を提示したことで、注目する場所が一目で分かった。前に来て指差ししながら「ここが危ないよ」とみんなに伝えることで、話すきっかけを作った。1つの写真だけでなく、阪神淡路大震災や他の道路の写真も提示することで、歩道橋も危ないかもしれないと気付いたため、自分たちで課題を解決することができた。

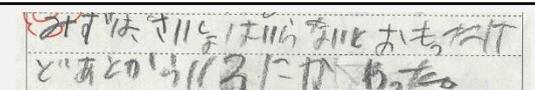
②では、前時までに出てきた備蓄品一覧の資料(資料10)を再度提示したことは、本当に必要な物は何か気付くために役立ったと考えられる。その結果、「水はいらな」と言っていた児童Aが資料を基に話し合う中で、「持

教師：ごはんと水が必要だと書いている人が2人いるね。前は、みんな水や食料がいるって言っていたね。何で変わったのかな。
 C：私は、変えていないよ。食料がないとお腹がすくからいるよ。
 教師：水は必要なの？
 B：喉が渴いたときに飲めばいいからいるよ。
 C：水があれば、何年か生きられるよ。
 A：どっちも学校にある。だから、いらなと思う。
 B：へえ。水もあつたっけ？
 D：倉庫に保管されていたよ。
 E：じゃあ、見てみれば。(教師が資料提示する)
 全員：水も食料もあつた。
 E：5番。2Lが204本。ごはんは1600食。だから、いらな。
 D：うん。いらな。
 教師：1600食あつたら足りる？
 A：深溝小は364人避難してくるでしょ。だから足りるよ。いや足りないか。待つて……。 (少し考える) 分からない。
 教師：洪水のときに、深溝小に避難所ができたんだけど知っている？
 C：いろんなところが水浸しになったんでしょ。
 教師：そうだね。そのとき深溝小には10人の人が避難したんだって。10人だと水や食料は足りるかな。
 全員：足りる。
 教師：じゃあ、地震のときは？
 E：364人避難するから。
 A：足りない？
 教師： $1600 \div 364 = 4$ だから。
 全員：朝、昼、晩、朝。ええ！
 A：ぜんぜん足りない。無理やん。
 E：食料も足りないから、水も足りないかも。
 教師：水は2L×204本分で408L $408 \div 364 = 1120$ 一人当たり1120mL。ちなみに、子どもは1日に水が2L必要なんでって。
 A：2Lを1本もらえたらちょうどいいのに。全然配れない。でも、ぼくはそんなにいらんけどね。
 B E：いや、いるでしょ。
 B：水がなかったら、暑くて、死んじゃう。
 C D：確かに。死ぬ。
 A：熱中症にかかるよ。ぼくなつたことあるし。
 D：水足りないね。
 A：つてことは、水も食料もいるね。持って行った方がいいかも。
 全員：(納得した表情を見せる。)

資料9 授業記録

番号	品名	数量	単位
1	アルファ米 (山菜おこわ)	700	食
2	アルファ米 (五目ごはん)	800	食
3	アルファ米 (赤飯)	50	食
4	アルファ米 (わかめごはん又は白飯)	50	食
5	保存水 (2ℓ)	204	本
6	粉ミルク (14.5g×6本)×18P	1	食
7	氷砂糖 (キャンディー) 20袋	1	食
8	乾電池 (単1、200本・単3、80本)	280	本
9	幼児用おむつ男女共用M	4	食

資料10 備蓄品一覧 (抜粋)



資料11 児童Aの振り返り

って行った方がいいかも」と本当に必要な物を考えられたことから手だて2は有効であったと言える。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

仮説Ⅰの手だて1について(身近に感じることでできる体験や活動)

三河地震後の生活の様子や現在の避難所の生活を体験したことで、経験したことがない避難というものを自分事として捉え、意欲的に活動に取り組むことができた。

実際にリュックサックに詰めて避難所まで歩いたことで、持って行く量が適切ではなかったと気づき、考え直したいという思いをもつことができた。

仮説Ⅱの手だて2について(子どもたちの考えを出しやすくするための資料の提示)

黒板に貼れるような大きなサイズの写真を提示したり、手元で確認できるような写真を使ったりしたことで、注目するポイントが分かり考えやすくなった。そして、歩道橋の写真だけでなく、阪神淡路大震災の写真や別の道路の写真などを使いながら話したことで、歩道橋も危ないかもしれないという考えにたどり着いた。

見たことのある備蓄品一覧の資料を再度提示したことで、数量に着目させて話し合い、水は必要だと気付くことができた。

(2) 抽出児童について

実践後に、児童Aが避難グッズを使って避難生活を行ってみたいという思いをもったため、やらせてみることにした。新聞紙で区切ったスペースに自分が選んだ避難グッズを並べ、自らグッズを紹介する姿が見られた。非常食のご飯を作ると、中にスプーンが入っていることや水とお湯のどちらでも作ることができるという便利さに気付いた。食べてみると美味しかったようで、避難所でも美味しいご飯が食べられることに喜んでいた。また、持ってきたクッションを使って寝転ぶ様子も見られた。他の子たちもそれぞれグッズを使用しながら過ごした。ラジオは3人の子が持っていて一斉に使用していた。すると児童Aが「3台のラジオからいろんな音が聞こえるから少しうるさい。持ってこない方がいいのかも」と言うと、児童Bも「確かにうるさいかもしれない」と納得した様子だった。児童Dから「小さい音で聞いたらいいと思うよ」や児童Eから「他の人とトラブルになるかもしれないからイヤホンで聞いたらいいと思う」と言われ、「なるほど。それだったら持ってきてもいいね」と考えを変化させていた。この姿は、今まで自分の考えを押し通そうとしていた児童Aが話し合う中で、課題を解決していった姿である。今後も意欲的に活動に取り組み、自分たちで話し合いながら課題を解決していくことを願っている。

(3) 今後の課題

本研究では体験や話し合いを行っていく中で、知識を得ることはできたが、学んだことを発表することまでは行わなかった。3学期に全校に向けて伝えたらどうかという話をもらったので、その機会を活用して学んだことを他の学級に伝える機会を設けたい。そうすることで、体験してきたことが確かな学びとなり、今後の生活へと生かされていくであろう。また、授業実践後に避難訓練がなかったため、避難訓練の様子の変化を見ることはできなかった。1月に予定されている避難訓練で確かめたい。

7 おわりに

本研究では、体験や資料など授業の準備が大変だった。しかし、この準備をしておくことで子どもたちが意欲的に活動に取り組んだり、教師主導ではなく自分たちで課題を解決したりすることができたため、準備を頑張ったよかったと思う。本学級の子どもたちは、学年が違い授業の内容も異なるため、毎回一斉授業をするのは難しい。そこで今回は、みんなで楽しめる授業になるように一生懸命考えた。毎回このような準備をするのは難しいが、時間を作って計画的に授業に取り組んでいきたいと思う。

引用文献一覧

文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」株式会社アイフィス 令和3年9月28日 P9

参考文献一覧

伊藤貴啓、萩原孝、近藤裕幸、真島聖子 「改訂版 愛知防災物語―昔・今・未来へつなげる命―」愛知教育大学出版会 平成29年3月30日

幸田町HP 指定緊急避難場所・指定避難所等一覧
<https://www.town.kota.lg.jp/soshiki/7/10476.html> (令和4年10月3日)

文部科学省「総合的な学習の時間編」東洋館出版 平成29年7月